発達理論の学び舎

Back Number: Vol 73

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1441. 再出発から人生の終焉へ向けて

1442. 時の最果てと陰陽的言語世界

1443. グリーグとムンクからの啓示

1444. 北欧の旅の空の下で

1445. 最後の日に向けた今日という最後の日

1446. 発達論者・教育哲学者としてのエマーソン

1447. 南極と自己の極深化

1448. 天気とデューイのプラグマティズム的美学

1449.「日記的作曲」実践に向けて

1450. 円と縁がもたらす存在の不滅性

1451. 充実した日に訪れる安らかな眠り

1452. 旅の終焉から新たな旅へ

1453. 言葉・感覚・自己

1454. 自然との共存的生活と昨夜の夢

1455. 上り道と下り道

1456. 祈りを捧げるあの老婆の彫像のように

1457. 全集の購入と作曲実践について

1458. 多始多終と定石の大切さ

1459. モーツァルトになった夢

1460. 日記についての所感と夏祭りの終わりから

© YOHEI KATO 2018

1441. 再出発から人生の終焉へ向けて

北欧旅行からフローニンゲンに戻ってきての二日目が始まった。書斎の窓から見える木々の優しい揺れと同様に、自分の心もただただ穏やかだ。

今日から再び自分の仕事に集中できるという予感がする。夏季休暇も早いもので、残り三週間ほどとなった。ここから集中的に未読の専門書を読み進め、フローニンゲン大学での二年目の研究に備えたい。

しっかりとした準備をすること。準備に次ぐ準備の中で自分の仕事を少しずつ前に進めていくこと。それだけが今の自分にできることであり、それこそが自分の望むことである。

ノルウェーのベルゲンに滞在した初日に風邪の初期症状を患ったが、今となってはすっかりと回復した。普段も旅行中も栄養のある食事と十分な睡眠をとることだけは心がけているため、後は外の気候に合致した格好をすることだけを心がければいいという教訓を得た。

昨日、チーズ屋の店主と立ち話をしたところ、やはり今年のフローニンゲンの夏は昨年に比べて涼しいようだ。25度を超える日がほとんどなく、20度前後の日が続く。今朝も気温が低く、長袖長ズボンを着用しながら書斎の中で過ごしている。そうした中、今の書斎に響き渡っているのは、エドヴァルド・グリーグの曲だ。昨日も絶えずグリーグの曲を流しており、北欧の旅の感覚が自分の中で落ち着くまでは、しばらくグリーグの曲を聴き続けることになるだろう。

起床直後に英文日記を二つほど書いた。北欧旅行の前までは、起床直後に日本語の日記を一つか二つ書く習慣があったが、その前に英文日記を執筆することが自然と新たな習慣となった。自分の日本語が、完全に言語宇宙の最果てに辿り着けるように、今の言語空間から日本語を外に激しく押し出すぐらいに英語を書きたいという衝動が姿を現し始めた。これから徐々にこの衝動を育て、そのエネルギーをそのまま学術論文の執筆に流し込んでいきたい。

夏季休暇に入ってから毎晩、自分の人生の最後の日について思う。具体的には、自分の人生が残り一年、あるいは一ヶ月であるとわかったら、何をしながら日々を過ごすのかということを毎晩の就寝前に考える自分がいるのだ。これは何かの確かめであり、決意と方向性の確認である。読むに読む

以上に書きに書くということを最優先させる毎日。そして、書きに書くというよりも、「表現に表現する」ということの中で最後の日を迎えたいという決意に満ちた静かな願い。そうした願いの中で、毎日を終えているのが今の自分だ。

昨夜おぼろげながらに、自分の人生の最後の一年は、これまでの自分が書いた日記を最初から読み返し、自分の人生全てを振り返りながら静かに人生の幕を閉じてく姿が見えた。若かりし頃の数十年前の日記から始め、一つ一つの日記に人生最後の自分がまた考えや感情を書き足していく。そのように、絶えず自己を著述し、絶えず自己を編纂しながら人生を終えるという姿。見えたのはそのような姿だった。

就寝前にもう一つ小さなことを考えていた。過度な一般化はできないが、少なくとも芸術や学術の領域で偉大な仕事を残してきた過去の人物たちは、二つ以上の表現形式をもって自らの仕事に打ち込んでいたということだ。グリーグやムンクが二つの表現形式を持っていたことは以前に述べた通りである。また、思い起こしてみると、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンも日記や手紙など文章を絶えず書く人間だった。

絵画であれ、音楽であれ、彼らの仕事を支えるものの中に、自然言語によって文章を書くことがあったということは見逃せないことだと思う。彼らの手紙や日記類を見ていると、一見すると芸術に関係のない事柄が記されていたりするが、そうした事柄すらも彼らの芸術活動の大切な養分になっていたように思えて仕方ない。また、彼らは手紙や日記の中で、自らの芸術表現に対して様々な事柄を実験していたように思う。これは芸術表現における思考実験の類だ。

彼らは絶え間なく書くということを通じて、自らの芸術表現をより高いものにしていったに違いない。書きに書き、表現に次ぐ表現を今日からこれまで以上に推進させていく。2017/8/17（木）

No.86: The Decline of Energy of Modern People

We have various types of energy such as physical, mental, and spiritual energy. In general, the energy of modern people are draining away. The amount of their energy tends to decline gradually.

I am concerned about the situation that many people are losing their energy to actualize their wholesome development. The present situation is so disastrous that people cannot attain their well-being. Thursday, 8/24/2017

1442. 時の最果てと陰陽的言語世界

今日も相変わらず不思議な感覚が続いている。これはおそらく旅の余韻と呼べるものなのかもしれない。旅が自己の存在の中を通り抜け、自己の存在が旅の中を通り抜けた後に漂う余韻である。自分の中に何かが通り抜けたという感覚と、自分が何かの中を通り抜けたという確かな感覚がある。

午後から降り始めた雨を見ていると、雨滴が時間に見えた。時は液体なのだという明晰な理解を得た。自分の内側で時間が完全に溶解し、それはいかなる形態にも変容可能なものとして捉えられている。北欧旅行から戻ってきて、少しばかりおかしな感覚が続いているようだ。

時の最果ての存在に対する確かな確信が昼食前の自分に飛び込んできた時、それは時折、自分がそうした場所に足を踏み入れているからだということを知る。先ほどいつもより遅めの時間に仮眠を取っていたが、仮眠から目覚める直前に、サトルな意識状態で知覚される千変万化するイメージ群を眺めていた。それはいつものように、絵画的であり、なおかつ文学的なイメージとなって現れる。つまり、純粋に多種多様なシンボルが現れることに合わせて、様々な文字が節や文章の形で現れるのだ。

今の自分の心の中の静謐さをどのように表現すればいいのだろうか。それは言葉の世界からこぼれ落ちてしまうようなものであり、絵画や音楽でしか表現できないものなのだろうか。作曲という新たな表現手段を磨く過程においても、そしてそれを高度な次元で獲得した後になっても、言葉の世界から一見漏れてしまうような事柄さえも言葉で表現できるように尽力したい。

時の溶解と変容の先に時の最果てがある。今日は夕方から就寝にかけて、時の最果てに触れた感覚が続きそうな予感がしている。

欧米で生活を始めて六年目にして突如、自分の内側の中に英語が自己の深層部位にまで流入し始めたことについて、以前言及していたように思う。日本語という単色円から、日本語という英語の複色円を持つ存在に自分が変わった。

早朝、陰陽の写真をインターネット上で見つけた時、それは自分の言語世界を寸分違わず表現し尽くしていることに気づいた。日本語と英語の明瞭明確な境界線と両者が溶け出す深層線。二つの自然言語を使う今の自分の内側の言語世界には、それら二つの異なる線が共存在している。陰陽の写真を見ていると、書斎の壁に掛けられているニッサン・インゲル先生の絵画作品が目に入った。

私がインゲル先生に創作を依頼した絵画のモチーフは、まさに地球全体を陰陽に見立てるものであったため、この絵画作品が自分の目に飛び込んできた。創作を依頼したのは昨年の春頃だっただろうか。私が日本に滞在していた時だ。あの頃の自分はまるで、自分の内側の言語世界が陰陽の世界に変容することを予期していたかのようである。

同時に、作品の主題として当時の自分が掲げていたことの本当の意味が、欧州での二年目の生活を始めようとする今になってようやく分かり始めている。あの時の主題の奥には無数の意味が潜んでおり、今新たな意味を一つ解き放ったのだ。『平穏な悟り世界における死と再生』というタイトルを自ら付け、主題と構図を依頼したこの作品は、未だ深遠な謎を秘めている。2017/8/17（木）

No.87: My Occupation

I turned over a new leaf in accordance with the beginning of a new day when I woke up. This morning revitalizes me and kindles my eagerness to create something new. Although my occupation accepted by the society is a researcher and consultant, I think that a “creator” or “producer” would be a more appropriate word to represent my occupation. I can feel my fervent desire to create or produce something new. I will never renounce my vocation.
Thursday, 8/24/2017

1443. グリーグとムンクからの啓示

夕食前に再び小雨が降り始めた。雨が窓ガラスに静かにぶつかる音が聞こえる。ガラスに付着した一つ一つの雨滴が重力に従ってゆっくりと垂れ落ちる。窓ガラスを洗うような小雨を眺めるとき、それは北欧旅行から帰ってきても依然として続く旅の余韻を洗い流そうとしているかのように思えた。旅の余韻の表層感覚を全て洗い落とし、自分の内側の底に真に堆積したものだけを残すのである。そのようなことを指示する雨のように私には思える。

旅行中に読んでいたエマーソンの全集と、旅行中に購入したグリーグやムンクに関する文献の中で下線や書き込みを入れたところをもう一度読み返すということを先ほど行っていた。これもまた今回の旅を整理するために重要な行為である。

旅の最中、折を見て、様々な角度からエマーソン、グリーグ、ムンクについて取り上げていたように思う。エマーソンの教育思想やグリーグとムンクを取り巻いた教育についてもどこかでまた書き留めておきたいと思う。結局、私が絵画や音楽を鑑賞し、思索的エッセイを読んだり作曲をしたりすることの根幹には、人間発達に関する考究がある。それを起点にして、科学と芸術が自分の中に共存在している。

先ほど改めてグリーグとムンクの生涯に関する文献に目を通していると、両者の共通点について新たなものが見つかった。そして、それは今の自分にとって極めて重要なものだった。

グリーグは生前、「私はバッハやモーツァルト、ベートーヴェンと並ぶことができるとは思わない。彼らの作品は永久だが、私は自分の時代そして自分の世代のために作曲したい」という言葉を残している。グリーグはまさに、同時代と絶えず向き合い、同時代の人間のために作曲という表現活動に打ち込み続けたのである。これはムンクも全く同様なのだ。ムンクは、画家としての生涯の中で何を一貫して持ち続けていたかというと、自身の作品を通じて、時代が抱える闇を浮き彫りにし、人間存在が不可避に抱える実存的問題を絶えず表現するという意志だった。

とりわけムンクはキルケゴールの思想から影響を受けており、人間が抱える不安を実存的な問題として捉え、自らがそうした不安と真摯に向き合うことを通じて作品を生み出し続けていたのだ。グリーグとムンクに横たわる共通点は、まさに時代と向き合いながら同時代の人間のために作品を創出し

続けたことにある。それが結果として、普遍的な次元にまで作品群が高められ、時代を超えて現代にまで受け継がれることになったのである。これはとても感動的である。

常に、常に同時代と向き合い、同時代の全ての人間のために自らの仕事に打ち込むこと。その姿勢の尊さを教えてくれたのがグリーグとムンクであった。

書斎の中に、時が交差し、時の最果てに誘うような交響曲が流れている。これは誰の曲だろうか。
2017/8/17(木)

No.88: Poietic Logic

Charles Sanders Peirce proposes that not poetic but "poietic" logic generates new ideas. Human beings are inherently poietic to generate themselves. Simultaneously, they intrinsically continue to create something new (e.g., new ideas, tools, products, etc.) by poietic logic. Humans are essentially destined to be a creator according to their own passions and their poietic nature.
Thursday, 8/24/2017

1444. 北欧の旅の空の下で

北欧の旅の空の下で思いを巡らせた様々なことが、近くて遠い思い出の中に溶け込んでいく。晴れ渡る北欧の雄大な空、雲に覆われた北欧の憂鬱な空。どんな日であっても、私は何かを考え、何かを感じながら、その日を自分の人生における真の一日にするために生きていた。

今、薄い雲がフローニンゲン上空の空を覆っている。カラスが赤レンガの家々の屋根の上を飛び去っていった。目の前の木々がさわさわとした風に揺られている。それら全体は、まるで鎮魂歌を奏でているかのようである。

オスロのホテルに宿泊中、ムンクの日記を読んでいると、彼の死生観について記述されている箇所を見つけた。「私たちは死なない。世界が私たちから死んでいくのだ」という一文がとても印象に残っている。私たちの肉体は確かに朽ち果てる。しかし、私たちは死滅することのない永遠性が宿ったものを持っているのだということを忘れてはならない。認知世界が私たちから消え去っていったとしても、それは久遠なものとして残り続ける。

欧州での生活を始めて以降、悠久の世界に足を踏み入れながら仕事に打ち込んだ過去の偉人たちを何度も目撃してきた。それを目撃するたびに、人は永遠な存在となり、人がなす仕事も久遠なものになることを知った。それは人間存在の自明な真理ですらあるように思える。

今日から再び自分の仕事に着手する。人間存在の成熟過程を考究することが自分の仕事であるから、作曲家のエドヴァルド・グリーグの自伝を読むことや午前中に作曲の学習を進めることも重要な仕事の一つである。昼食前の二時間ほどを使って、以前受講していたMOOCの作曲講座をもう一度視聴したいと思う。全六回のクラスで構成されている本コースを、今日から再び一回のクラスずつ進めていく。

自分の内側の思考と感覚を自由自在に曲として表現するまでの道のりは長い。日本語を書くときでも英語を書くときでも、内的現象を文章で表現するためには語彙と文法が必要となる。作曲に関しても全く同じであり、今の私は曲を作るための語彙と文法の基盤が脆弱すぎるのだ。音楽を鑑賞するためや音楽を語るための知識は一切いらない。そのようなものは自分にとっては全く不要である。

とにかく、自分で曲を生み出すための語彙と文法を獲得したいのだ。一日一枚のデッサンを描くかのように、一日一曲を作りたい。目の前に物がなくても、心の眼や魂の眼を通してデッサンをするように曲を作りたい。その日のその瞬間に自分を捉えて離さない心象風景と魂象風景を曲として残していくのである。その日に向けて絶えず作曲の学習と実践を続けたい。その過程において、ムンクの「文芸日記」にならい、「作曲日記」を書いていく。

これは作曲の学習と実践の過程で得られたことを書き留めることのみならず、それよりもむしろ、曲の題材となる心象風景と魂象風景をまずは言葉の形で残しておくためにある。日記は学術的・芸術的な試行の場であり、その日を確かに生きていたという存在の記録となる。自分にとって日記はそのためだけにある。2017/8/18（金）

No.89: Reflective Repetition for Learning and Development

Mere repetition cannot lead to meaningful learning. As a result, this kind of learning cannot foster our development. Transformative learning requires reflective repetition. One of the essential characteristics of dynamic systems is recurrence; dynamic systems evolve through repetition.

However, we have to be careful that recurrence in the context of learning has two meanings: (1) mere repetition without reflection and (2) reflective repetition. Needless to say, only the latter facilitates our learning and development. Thursday, 8/24/2017

1445. 最後の日に向けた今日という最後の日

最後の日は遠いはずなのに、毎日が最後の日のように感じる。早朝のフローニンゲンは、自己と世界を隔てる一枚の薄い膜のような雲に覆われていた。その膜のような雲は、太陽の強い光を通すことはなく、ただ少しばかりの明るさを地上に届けている。

昼食後に激しい雨が降った。怒りのような、嘆きのような激しい雨だった。書斎の窓からその光景を少しばかり眺め、何を考えるともなしに再び自分の仕事に取り掛かる。北欧からの旅を終え、やはりまだ自分の中で整理することのできないものが無数に存在しているようなのだ。

必ずやってくるはずの最後の日はまだ遥か彼方にあるはずなのに、それがとても近くにあるような気がしている。一日一日を過ごしていく日々が最後の日として知覚される。しきりに昔のことが思い出されたり、自分が出会ってきた全ての人たちの顔が思い浮かぶ。この世界で生きてきたことと生きていくことが、たった一人の歩みであるのと同時に、たった一人の歩みではないということがわかるのではなく、見える。そしてそれに触れることができる。

コペンハーゲン、オスロ、ベルゲンへ訪れ、フローニンゲンに帰ってきた私を包むのは決して絶望でも希望でもなかった。自分を包むのは、静と動を折り重ねた一枚の衣のような感覚だ。私は、一人の人間として生きなければならない。一人の科学者として研究を行い、一人の実務家としてこの世界に関与しなければならない。そこには具体的な肉体があり、具体的な活動があり、具体的な人々がいる。そうした具体的なもの全てが、一枚の衣の中に包まれ、その衣が優しく揺れる姿を眺め続ける意識状態が続く。数年後の未来など見えるはずもなく、明日もわからない。

昨日という日が存在したのかすらもわからない時間感覚が続く。ある街のある家の扉を開けた瞬間に、地球の反対側の街の、ある家の扉から外に出ていたという感覚。地上界に咲く野花を何気なく眺めていたら、天上界の小川のほとりに立っていたというような感覚。

音楽。音楽の持つ力に存在が震えさせられる体験を今日もした。音楽はこの世界の神秘の一つだろう。自分のために、誰かのために音楽を作りたいという思い。それは科学的・哲学的な探究に従事するのと全く同じほどの強い思いである。

北欧諸国を巡りながら、自分は救いを求めていることが見えてきた。だが、決して救われないことを知っている。ただし、救われない世界のその先に救われうる世界の姿が少し見えたのだ。

書斎の中にピアノ曲が鳴り響いている。一つ一つの音の進行と同時に、時が刻まれていく。今この瞬間の自分は、全ての事物が生成される館にいるかのようだ。そこは時も流れない。そこにあるのは、永遠の果ての一歩先にある永遠と無限の空間的広がりだけである。

最後の日に向けた今日という最後の日を充実したものとするために、再び夕方からの仕事に取り組みたい。2017/8/18(金)

No.90: My Second Academic Year at University of Groningen

──The world exists for the education of each person──Ralph Waldo Emerson

My second academic year at University of Groningen will start from this September. Since my first year ended in the middle of June, I have waited for the beginning of the new academic year for a long time.

In retrospect, I have devoted myself to my work for the past two and half months, which could cultivate my academic and professional expertise. I also expect the second year to expand and deepen my expertise. As Emerson points out, I can't help but think that the world in the second year will exist to educate me. Friday, 8/25/2017

1446. 発達論者・教育哲学者としてのエマーソン

夜が間もなく迫っている金曜日のフローニンゲン。今この瞬間は、早朝の晴れ渡る空と見間違えるかのようなライトブルーの空が広がっている。西の空に雲はほとんどなく、東の空に一つ入道雲が

取り残されている。その白色の入道雲がライトブルーの空に微動だにせずたたずんでいる様子は圧巻である。

夕方を迎える前の意識状態から少し変化があり、あの不思議な意識状態からは落ち着いている。今日は科学的探究の仕事に取り掛かることは一切なく、エマーソンの全集の中に記した下線や書き込みを再度読み返しながら、文章として自分の考えをまとめたり、作曲の学習と実践に多くの時間を充てていた。

それにしてもエマーソンは、発達論者としても教育哲学者としても注目に価する学者だと思う。エマーソンは、発達に向けた準備の期間に対する洞察が深く、準備を迎えていない者に学習機会を無理に与えることを危惧していた。特に子供に対して、抽象的な概念が詰まった書物を無理に与えることを強く問題視していたのである。こうしたことは子どものみならず、成人にも当てはまり、エマーソンは発達に向けた準備期間の存在を強く訴えていた。

エマーソンの全集を読みながら、彼の発達現象を見る眼差しに大変共感し、彼の慧眼には得るものが多くあった。エマーソンが残した警句を挙げればきりがないが、もう一つ印象に残っているのは、私たちの誰もが消費者であることは確かだが、生産者である者があまりに少なすぎるということについてもエマーソンは警鐘を鳴らしていた。

人は本来、大なり小なり自分の持っている固有の才能を活かして、この世界に何かを創り出すことができるはずなのだが、エマーソンの時代から現代にかけて、生産者である人間や生産者であろうとする人間が圧倒的に少ないことに対して複雑な思いになる。私が日々寂しさと孤独さ、そして憤りを感じているのはこの点にある。どうして人はこの世界に何かを創り出し、世界に深く関与することをしないのだろうか。

この世界に何かを創り出していくために不可欠な事柄は、自分の魂を知ることと自分の霊性を発見することだろう。生産者になることをせず消費者のまま生きるということは、隷属者として生きることだけを意味しているわけではない。事態はそれよりも深刻であり、それは結局自分の魂を知らないということを意味しており、自己の霊性を発見していないということなのだ。いつまで魂の抜けたまま生き、いつまで自己の固有性を通じて世界に関与しないことを続けるのだろうか。

© YOHEI KATO 2018

薄い白色の雲が遠方の空に横一線に塗られている。手前には濃い青色の空、そしてさらに手前には薄い青色の空が広がっている。それはまるで三色旗のようだ。

エマーソンの全集を再読している最中、文章の内容と全く関係なく、今度はイタリアに足を運ぶことを確信した。正直なところ、古代エジプトや古代ギリシャの創造物と比べて、古代ローマの創造物には今のところあまり惹かれるものがない。だが、中世ルネサンス期のイタリアの創造物には大変関心がある。とりわけ、ダ・ヴィンチとミケランジェロが私を呼ぶ。来年の春のどこかに是非ともイタリアに足を運びたい。2017/8/18(金)

No.92: Teaching and Learning From a Complexity Perspective

Teaching is not offering pre determinedly packaged knowledge to learners. Learning is a process by which learners can learn themselves through their previous knowledge and experience. In other words, learning is a process of autopoietic and constructive endeavor to enable learners to reproduce and reconstruct themselves. Teaching should be to facilitate such learning. Friday, 8/25/2017

1447. 南極と自己の極深化

昨日に続き、今朝の目覚めも比較的ゆったりとしたものだった。それは、北欧旅行後の何かしらの調整を自己の存在が試みていることと関係しているかもしれない。内側に浮かぶ雑然とした思考や感覚を透き通った咀嚼物に変化させていくかのように、時間をかけて何かを発酵させようとしているようだ。内側の表層世界は未だ雑然としており、少しばかり慌ただしいのだろう。そうした雑然さと慌ただしさを鎮めるために、比較的長い睡眠時間が必要になっているように思える。

今回の旅から真に得られたものが自分の言葉となり、自分の骨身になる日は随分と先のことになるかもしれない。それが実現するためには、時の経過が必要であり、時というふるいにかける必要がある。時の発酵過程を経たのち、それはこの次に待つ自分の確かな土台となるだろう。

早朝の目覚めと共に、外側の世界に激しい雨が降っていることに気づいた。何かを訴える雨の声が聞こえたのである。辺りは鬱蒼とした世界として私に知覚された。どんよりとした雨雲から雨がこの

世界に降り注いでいる。数羽の黒い鳥が空を東から西、西から東へと横切っていく。鳥たちにとってみれば、今日が土曜日であることなど関係なく、自然は同様に曜日など気にしていない。目の前に見える自然界は時間を超越し、超然とした姿でたたずんでいるように思える。世俗的な時間感覚に縛られているのは人間だけのようだ。

昨夜の就寝前に気づいたが、随分と日暮れが早くなった。夜の九時半になる頃には、当たりがほぼ暗闇に包まれるようになっている。十時に就寝する頃には辺りはもう暗かった。ひたひたとあの厳しい冬が近寄ってきていることを知る。北欧旅行の最中、ホテルであるドキュメンタリー番組を見た。それは南極の深海を探索する特集だった。

南極の深海の生物たちが巨大化しているのは、南極の海の冷たさがもたらす諸々の恩恵によるものだということを知った。極寒の地は、取り巻く状況がただ過酷なだけではない。その過酷さがもたらす恩恵があるのだ。

精神を突き刺すあの過酷な冬がまたやってくる。自己を極度に圧縮する張り詰めた冬がまたやってくる。こうした冬を自分は何度も何度も通り抜けていかなければならない。その先に巨大化した自己、いや極深化した自己の存在を見たいと思う。2017/8/19（土）

No.93: Teaching as Communicative Practice

Teaching is communicative practice. Niclas Luhmann's systems theory posits that the social aspects of systems should be recognized as communication. If I continue to cultivate my understandings of teaching as communicative practice, Jürgen Habermas's theory could be also beneficial. Anyway, teaching is a communicative action based on the relationship of a couple of dynamic systems. Friday, 8/25/2017

1448. 天気とデューイのプラグマティズム的美学

早朝の鬱蒼とした雨雲が静かに立ち去り、青空が広がり始めた。薄い雲を残しながらも、広がる青空を眺めていると、オスロ国立美術館で見た印象派のいくつかの絵画作品を思い出す。それがと

ても甘く感じる。空の青さと白い雲、そして穏やかな朝の太陽が相まって、甘美な世界を生み出している。それは自己が溶け出しそうな甘美さである。

九月からフローニンゲン大学での二年目のプログラムとして実証的教育学の探究が始まる。フローニンゲン大学で過ごす二年目は、もっぱら科学的な測定手法を活用しながら、教育プログラムや教育政策の効果を実証的に解明していくことを目的としている。

今回のプログラムでさらに理解を深めるであろう統計的な手法に加え、昨年に引き続き、応用数学のダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法をより深く習熟していきたいと思う。それに並行して、自分の関心を引きつけてやまない教育哲学に関する探究を行っていく。教育哲学の知見は、子供の教育と成人の教育のどちらにも深く関与し続けるための、なくてはならない思想基盤を形成することに一役買ってくれるだろう。偉大な教育哲学者は様々いるが、中でもジョン・デューイの思想は注目に価する。

デューイの二巻の全集をそろそろ本腰を入れて読み進めたいと思う。オスロに滞在中、ホテルの中でムンクの画集を眺めていたところ、デューイのプラグマティズム的美学の思想が言及されていた。デューイ曰く、完全な美的体験というのは、まずは生命のリズムとして立ち現れるとのことである。そして、そこから自己と生命のリズムが交感する段階へと至る。

北欧の雄大な自然の中で体験していたのはまさにこれだったのかもしれない。自己が溶解しそうな流れは、まさに生命のリズムそのものに他ならず、ここでの生命は自己と自然の両者である。二つの生命のリズムと私自身が交感をなし、それが絵も言わぬほどの美的体験を生み出していたのではないかと思う。オスロの街を歩いていた時の光の体験も、もしかすると美的体験の一つの表れだったのかもしれない。

天気がますます良い方向に向かっている。一羽の白いカモメが空を優雅に舞っている。その背中に朝日が反射し、とても眩しく見える。天気予報を見ると、どうやら昼までは晴天のようだ。だが、そこから再び天気が崩れ、夜まで雨が続くようだ。天気というのはなかなか気難しい。しかしそれでも、今この瞬間の景色のように、印象派の絵画のような世界を提示してくれるから不思議なものである。今日も静かに着実と自分の仕事を進めたいと思う。2017/8/19（土）

No.94: Contextual Learning

Learning the same subjects in various contexts is crucial to acquire systematic knowledge. Our knowledge is gradually built up in an organized but nonlinear way through learning in multiple contexts. The shape of our knowledge structure is like networks. Whenever I learn something, I will pay attention to the significant impact of context on learning. Friday, 8/25/2017

1449.「日記的作曲」実践に向けて

今日はとても寒い日だった。まだ八月中だというのに、室内では上着を着用し、長ズボンを履いている。

今日一日の天気を振り返ってみると、起床直後の薄い雲が雨雲に変わり、まずは午前中に激しい雨が降った。夕方、美しい天気雨と遭遇したことがとても印象的だ。小さな雨粒の一つ一つが太陽光に照らされ、輝きながら地上に降り注ぐ姿はとても綺麗だった。太陽の光に照らされると、雨粒は一つ一つが確かな存在感を放っていた。

単純に夕日に照らされた黄金色の世界の中に雨が降る様子が美しかったのではなく、一つ一つの雨粒が個性を持ち、その一つ一つの輝きが美しかったのだ。その美しさに思わず書斎の机の前から離れ、窓辺に近寄った。天気雨の輝く姿を窓越しにずっと眺めていた。

夕食を食べ終えた今はまた晴れ間が広がっている。日が沈むのが早くなり始めたとはいえ、現在の時刻である七時半はまだ夕日の輝きが残っている。ここから一時間ほどが今日の夕日の最後の輝く時間帯となるだろう。午前中の激しい雨、そして夕方に襲った天気雨が嘘のように、辺りは静かにたたずんでいる。

夕方から夕食前にかけて、オンラインゼミナールの第五回目のクラスに向けた説明資料を作成していた。資料の完成にめどが立ったところで、作曲について少しばかり考えていた。日記を執筆するように、日々の思考や感覚を音楽として表現すること。日々移り変わる内側のリズムとメロディーを日記を書くかのように曲にしていくこと。つまり、「日記的作曲」実践の実現に向けて少しばかり考えていた。

昨日、実際にその瞬間の内的現象を曲にすることを試みたところ、作曲の実践を始めた頃に比べると随分とその進歩が見えた。感覚的に、日記を100万字ほど執筆したあたりから、日記を通じた様々な変化が自分の内側で確認されるようになった。それを考えてみると、作曲に関しても100万小節作成してみた時に初めて、音楽言語を通じた表現技法と自己の内側の双方に変化が生じるのかもしれない。ただし、曲を作ることが文章を生み出すほどに自由自在になっていない現段階では、100万小節を生み出すことはそれほど容易なことではない。

そのため、例えば一日に20小節ほど、自己を捉えて離さない思考や感覚を音として表現していく。そうすると、一年でおよそ7,200小節を生み出すことが可能であり、一年半ほどこの実践を継続させると、1万小節ほど作成することができる。作曲における小節の数と文章執筆における文字の数を比較してみた時に、作曲において小節を生み出すことの方が難しいであろうから、1万小節に到達するのですら容易ではないだろう。しかし、1万小節というのは、作曲実践における一つ大きな区切りの地点であるように思う。

今日から実践しようと思っているのは、何気なく生まれてきたメロディーをその場その場でボイスレコーダーを用いて録音し、短い小節でも構わないので、特定の思考や感覚・感情に着目をし、それを音として表現しきれるところまで表現することである。その際に、主題となる思考や感覚・感情について表現が終わったら、必ずタイトルを付けることにしたい。これを毎日継続していけば、“desolate”と“desparate”の差異を音として表現することができるだろし、“soul”と“spirit”の明確なる差異も音として表現できるようになってくるだろう。

とにかくおびただしいほどの数の小節を生み出していくことが実践上の鍵となる。外国語を話そうとしない者に外国語が話せるようになるわけはなく、日本語話者は日本語の文法書を握りしめながら日本語が話せるようになったわけではない。作曲でも全く同じだ。

とにかく曲を作る過程の中で音楽文法を付随的に理解し、曲を作ることによって作曲の技法を洗練させていくという道を歩む必要がある。まずは1万小節の創出へ向けて今日から一歩一歩進んでいきたい。2017/8/19（土）

No.95: A Wonderful Day

Today was a fruitful day as usual. In what way? Unfortunately, it is asinine to try to find the meaning or reason to define what a wonderful day is. We feel a day as fruitful in a translogic and transversal sense. I just felt that today was wonderful as it was.

The sunset in the sky of Groningen is a paragon of beauty to symbolize that today was a wonderful day. Friday, 8/25/2017

1450. 円と縁がもたらす存在の不滅性

思っていた以上に日が暮れるのが早くなった。昨日よりも10分ぐらい早く日が沈み、暗闇が訪れた。一日の振り返りをする際に、それを闇夜の中で行うのは随分と久しぶりのように思われる。書斎からの景色が真っ暗闇に包まれると、随分と自分の内的感覚が変わるものである。

書斎の中で鳴り響く音楽についての印象も変わり、静かな闇夜の世界は、自己の奥底に沈んでいくことを促すかのようである。午前中にピタゴラスの業績について考えることがあった。その中でふと、円が存在するためには中心点が必要であるという当たり前のことに再度考えを巡らせていた。仮に自らの存在を一つの円だと捉えた時、果たして私たちは自己の中心点を知っているだろうか。それが何であるかを明確に認識し、中心点を持つ一つの円として日々を生きているだろうか。そのようなことを考えていた。

一つの円が他の円と関係を持ち合う時、「縁」が生まれる。人と人との間に真に縁が生まれるためには、円が存在していなければならず、円が存在するためには確固とした中心点が必要である。確かに全ての人間は縁によって関係を結んでいるかもしれないが、縁によって真に他者と強く結ばれるためには、個たらしめる中心点が必要であるように思う。さもなければ、他者と縁を結ぶための円の輪郭が曖昧模糊としたものになり、相互に影響を与え合う真の縁が生まれることはないだろう。

断続的に降り続ける雨を眺めながら、そのようなことを考えていた。書斎の外に広がる世界が、本当に闇の世界に消え去っていく。見えるのはもはや街灯の明かりや遠くの家に灯る光だけとなった。そして、また雨が降り始め、雨が窓ガラスにぶつかる音がこだまする。全てのものが暗闇に消えゆく

様を見ながら、仮に自己が消滅した後に何が残るのかを考えていた。これは北欧旅行の際によく考えていた主題であった。肉体の消滅の後にも、自らの魂や霊性は不滅であることの確信を得てからしばらくの時が経つ。

今書斎の中で静かに自分の内側の声を聞くと、もう少し先の重要なことが見えてきた。そうした魂や霊性というのは結局何なのか。それは自己が一生をかけて築き上げてきた縁なのだと思う。ある人間が自らの魂と霊性を具現化した言葉や作品が不滅であるのはそうした理由からなのだ。

彼らの言葉や作品が、時代を超えて多くの人に影響を与え続けていられるのはそういう理由からなのだ。仮に自らの肉体が朽ち果てようとも、この世界に生み出してきた創作物とそれを通じた他者への関与から紡ぎ出される縁は不朽不滅なのではないだろうか。

一人の人間を取り巻く縁は永遠に存在し続けるのではないだろうか。そうではないだろうか。そうであれば、死というものをもう一度根本から捉え直さなければならない。2017/8/19(土)

No.96: Everyday is Our Birthday

It's nearly dawn. The light of the sunrise today will show up soon. In parallel with the beginning of a new day, I feel as if I were reborn. Today is a day for my rebirth. Our birthday is not a particular day. It is everyday. Saturday, 8/26/2017

1451. 充実した日に訪れる安らかな眠り

──充実した日には、安らかな眠りが訪れる。そのため、充実した人生には、安らかな死が訪れる──レオナルド・ダ・ヴィンチ

昨夜はよく眠ることができ、起床直後から一日の仕事に向けた活力が溢れているのがわかる。昨夜の夢は体育館でバスケに熱中している姿を描写しており、そこでの活動的なエネルギーが夢から覚めた後の自分に受け継がれているかのようだ。

昨日よく眠ることができたのは、おそらく昨日が充実した一日だったからだろう。全ての日を充実感と幸福感に満たされたものにすること。それを継続させていけば、最後の日にはきっと安らかな眠りが訪れるだろう。

今日は早朝から晴れ間が広がっているが、今日も昼食後から夕方にかけて雨が降るらしい。しかし、来週は天気が良い日が続くそうなのでとても嬉しく思う。ここ最近虹を見たのはいつだっただろうか。今、遠くの空にうっすらと虹が見える。少し灰色がかった雲を通り抜け、一本の虹が曲線を描きながら天空に向かって伸びている。しばらくその光景を見ていると、虹は音を立てることなく静かに消えた。

虹があの瞬間に見せた輝きを思うとき、そこには瞬間的な虹自身の充実さがあったのだと思う。であるがゆえに、虹は安らかに消えていったのだ。充実した生には安らかな死が訪れる。そのようなことを思わずにはいらない光景を早朝の空に見た。

北欧旅行からフローニゲンに戻ってきて以降、科学的な専門書や論文を読むことを一切していない。北欧の旅を通じて得られた新たな感覚とゆっくりと向き合うことが今の自分に求められていることであるため、科学的な専門書や論文を読むことは今の時期に相応しくないのだと思う。

なぜだか哲学書も今の自分にはほとんど入ってこない。その代わりに、エマーソンの全集を含め、思索的なエッセイは自分の内側の世界に淀みなく流れ込んでくるかのようである。また、画集や音楽家の自伝なども今の自分の状態には相応しく、今日はそうしたものを読みながら一日を過ごすことにしたい。夏季休暇も残りが限られてきているため、一日一日をさらに有意義なものにしたいと思う。2017/8/20（日）

No.97: Nature and Reincarnation

As Emerson argues, nature is a sacred text that encapsulates rich meanings. Once we unpack the hidden meanings, we will acquire spiritual enlightenment. Rather, we will obtain the unity with nature.

We will experience it as the beatitude that transcends the cycle of reincarnation. Today has started at sunrise, and the light of the sunrise tells me to outshine my reincarnation.
Saturday, 8/26/2017

1452. 旅の終焉から新たな旅へ

しとしとと雨が降り始め、雨滴が窓ガラスにポツポツとぶつかる音が聞こえる。同時に、先ほどと全く同じ場所に、しかし先ほどよりも鮮やかな大きな虹の架け橋が突如として遠方の空に現れた。あの虹はどこにつながっているのだろうか。七色のそれぞれが肉眼ではっきりと捉えられるほどにその虹は鮮やかだ。

自然が開示する神秘的な情景には、いつも心を打たれるものがある。いやむしろ、心を打たれる存在そのものが消滅し、自分が自然への畏怖心の中に溶け込んでしまうかのようである。降り続ける雨によって、遠方の空に見えた虹はすっとどこかに消え去ってしまった。先ほど同じぐらいに静かにそれは消え去った。

自然の神秘について思いを馳せていると、北欧の雄大な景色が思い出された。あの時も壮大な景色の中に自己が溶解していたように思う。オスロからベルゲンに向かう列車の車窓から見たノルウェーの雄大な山々と湖が今もなお強い印象を残している。山道が自転車道になっている箇所や湖の脇に自転車道があることを度々目撃した。あの雄大な景色を眺めながら、自然の中を自転車で駆け抜けたらどれほど爽快だろうかと思った。いつかあの道を自転車で走り抜けたいと思う。

忘れることのできないノルウェーの雄大な美しい景観を思い出していると、雨が止み、再び晴れ間が広がり始めた。夏のフローニンゲンの天候は本当に変化が激しく、とても気難しいように思える。だが、万物の根源に変化を据えることができるのであれば、この変化に富む天気は万物の根源的な姿だと言っていいのかもしれない。北欧旅行がひと段落したばかりだが、また新たな旅に出かけたいという小さな思いがすっと湧き上がる。

次の旅に早急に出かけるというわけでは決してないのだが、自分を旅に仕向ける働きかけがなされているかのように、旅へ突き動かす何かが自分の内側にあることを知る。今度の旅は、春の季節にしようと思う。四月の中旬あたりに、ミラノに二日、ローマに三日、ギリシャに四日間ぐらい滞在する

小旅行を計画している。今から半年以上先のことなのだが、やはりこの旅も自分にとって重要な意味のあるものになる予感がすでにしている。旅というのはそもそも何であり、何をもたらし得るのかということをより深く考えなければならない。2017/8/20（日）

No.98: My Life and The Life of Others

My life is the life of others, and at the same time, their life is mine. This river leads to that river. Both rivers connect with a vast expanse of ocean. The life of others and my life come together and dissolve into oneness. Whose life is isolated? Nobody's. Saturday, 8/26/2017

1453. 言葉・感覚・自己

早朝の鬱蒼とした天気が嘘のように、昼食前から清々しい空が広がり始めた。早朝の天気予報では午後から夜にかけて雨が降ることを示していたが、先ほどもう一度予報を確認すると、午後からは完全に晴れるようだ。空が晴れ渡ったのとは対照的に、依然として一つ謎めいた疑問に捕まっていた。それは先ほどコーヒーを飲んだ時、なぜお茶が「茶」よりもむしろ「お茶」と日本語で発音するのかという問題だ。

コーヒーに関しては、「おコーヒー」という言葉を聞いたことはないし、それは大きな違和感をもたらす。昼食時に晴れ渡った空をぼんやりと眺めがらその問題について考えていると、「お菓子」も接頭辞に「お」が付くため、これは日本の歴史上、菓子や茶を位の高い人物に献上する習慣があり、そのため「お（御）」という接頭語がそれらの言葉についたのではないかとふと思った。

一方、コーヒーは外来のものであり、お茶やお菓子という言葉が生まれた時代よりも随分と後になって日本に入ってきたがゆえに、「お」が付くことはなかったのではないか。そのような考えに行き着くことによって、視界に広がる空の青さと同様に、その問題に対する疑問が随分と晴れ渡ってくるかのような気がした。

ちょうど昼食前に晴れたおかげで買い物に出かけることができた。外の空気を吸うのは前回の買い物以来であるから、四日振りである。スーパーに向けて今日は少し小走りをしたい気持ちだったので、1kmほどの片道を軽くランニングした。その最中に、言葉を大切にすることは感覚を大切にする

ことに他ならないという気づきが降ってきた。これは以前にも何度か訪れたことのある気づきなのだが、今日もまたその気づきと出会った。言葉は単なる概念の寄せ集めではなく、それよりもむしろ、感情や感覚、その人の存在自体が内包されたものなのだ。

言葉で語れぬものがあるから感覚に頼ろうとするのは単なる逃避である。結局そうしたものは感覚でも捉えきれない。そもそも言葉と感覚は密接に結びついたものなのであるから、両者を深化させていく道を歩む方が賢明だと私は思う。今この瞬間に言葉で語りえぬものが無数にあったとしても、自らの存在が成熟し、言葉が成熟を遂げると、それが言葉で語り得るものに変容することがあるのだ。

これはほとんどの内的現象に対して当てはまるだろう。また興味深いことに、存在の成熟とともに深まるのは言葉だけではなく、感覚も深まっていく。上述のように、言葉と感覚が絶えず分かちがたく結びついているため、存在の深化が両者の深化を促すのである。言葉を大切にしないことは、感覚を大切にしないことを意味し、自己の存在を大切にしないことを意味するように思えて仕方ない。ということは、現代人のほとんどは感覚を大切にせず、自己の存在すらも大切にしていないと言えるのではないだろうか。2017/8/20（日）

No.99: Silent Contemplation

A piece of music of Jean Sibelius is making gentle and merciful sounds. I unintentionally stopped my work for a while, just listening to the music. After I came back to myself, I began to reflect upon my life. This contemplation enabled me to restart my life. The starting point is connected with the previous end point and the final destination, too. Saturday, 8/26/2017

1454. 自然との共存的生活と昨夜の夢

今日の早朝は嬉しいことが一つあった。それは、起床時に小鳥の鳴き声に誘われる形で目覚めたことである。寝室の窓の外で、小鳥の鳴き声がこだまする音によって目覚めることができたのだ。こうした形で目覚めるときほど幸福感に満ちた一日のスタートはないであろう。

目覚めた瞬間、自然と共存し、自然の中に溶け込む形で日々の生活を送りたいと改めて思った。私たちの日常生活は、科学技術の進歩もあり、間違いなく便利になっているのは確かである。だが、現代社会には人工的な物質があまりにも多すぎるように思う。そうした過剰な人工物が、私たちの生活の質をむしろ下げていることすらあるように思えてくる。

例えば今日の起床時に、人工的な目覚ましと鳥の鳴き声のどちらで目を覚ますことが自分に幸福感を与えてくれるかを考えてみると、生活の中に自然を感じることがいかに重要かを痛感させられる。小鳥の鳴き声ひとつでも、これほどまでに朝の目覚めが幸福感に満ちたものになり、今日という一日の生活の質がより豊かなものになったことを疑うことはできない。

北欧から戻ってきて以降は、少しばかり睡眠時間が多くなっていた。というのも北欧で風邪の初期症状のようなものを患い、それを回復させるために十分な睡眠が必要だったようなのだ。しかし、今日からは再び通常の時間に起床することができた。自分の状態を確認してみると、風邪の初期症状は見事に収まっている。身体が回復し、今日から再び活力をみなぎらせながら仕事に従事するということを祝福するために、あの小鳥たちが寝室の窓の外で歌を奏でてくれていたのかもしれない。

昨夜は少しばかり印象に残る夢を見た。夢の場面は、実際に私がかつて住んでいた山口県の社宅だった。私が住んでいたアパートの前には公園があり、その公園で両親と遊びとは言えないような謎解きのようなものに取り掛かっていた。すると突然、激しい雨が降り始めた。

私は傘を持っていなかったのだが、大きな羽毛布団を持っており、それを使って雨を防いでいた。謎解きは一向に進まず、羽毛布団を雨よけにしてしまうと、布団が台無しになってしまうような罪悪感が自分を襲った。さらには私は受けなければならない試験が差し迫っており、その日に2科目終了していたのだが、残り10科目の試験があった。夢の中で指を折りながら具体的な科目名を挙げてみると、英語が3科目、数学が4科目、社会が2科目、理科が1科目だった。

その試験に向けて学習時間をする充てることはとても馬鹿らしいことのように思えたが、公園を後にし、羽毛布団を持って三階の自宅に戻ろうとした。階段を上っていると、以前四階に住んでいた方と鉢合わせになり、挨拶をした。

© YOHEI KATO 2018

すると、上っている階段とは反対側に下り専用の階段が現れ、階段の片隅に、詰め込まれた書籍ではち切れそうになっている自分のカバンが置かれていることに気づいた。それを拾いたいという気持ちが当然あったのだが、上り専用の階段から下り専用の階段へどう移行すればいいのかわからなかった。また、雨に濡れて重くなっている羽毛布団を早く自宅に持って帰りたいという思いから、自分のカバンを拾うことを断念し、自宅に戻ることにした。そこで夢から覚めた。

公園内で行っていた不思議な謎解き、突然の激しい雨、傘代わりとなった羽毛布団、高校時代を彷彿とさせるような科目の試験、不思議な下り階段、書籍の詰められた自分のカバン、そして下り階段に行く方法がわからずにカバンを置き去りにする自分。それら一つ一つが間違いなく何かを象徴しているように思える。夢の記録から始まる一日。

今日は晴天のようであり、爽快な気分で今日の仕事を進めることができそうだ。2017/8/21(月)

No.100: Franz Schubert

I was struck again by the prolific music composition of Franz Schubert. He died quite young, but he produced a myriad of pieces of music. Schubert was a precocious and prolific composer. His attitude towards his work to compose music ignited my spirit yesterday. Presumably, I will purchase complete music scores of his piano sonatas in order to dialogue with him through his scores. What brought him to his ceaseless creative work? What was his zest? Sunday, 8/27/2017

1455. 上り道と下り道

ここ数日は、北欧旅行を通じて患った風の初期症状のせいもあってか、あるいは旅を通じて得られた濃密な感覚が言葉を紡ぎ出すことを抑制していたのか、日記の分量が減少していた。特に毎日どれだけの量の文章を書くかを決めてはおらず、書き留めておくべきことだけを書き留め、内側の表現を待つものだけを文章に表現するということを行っているため、文章の量自体はいつも問題にしていない。

だが、そうは言ってもここ数日間は、自分の言葉が滑らかに出てこないという状態が続いていた。その分ゆっくり言葉を紡ぎ出すことができていたことは間違いないが、そうだとしても言葉の湧き上が

る度合いというものが極度に低かった。今朝起床した時に、文章を書いていないにもかかわらず、今日から再び文章を書く感覚が戻ったことに気づいた。文章が淀みなく流れるように言葉を紡ぎ出していくことは簡単なことではない。

冒頭の理由のように、様々な要因によって言葉が出てこなくなる時がある。今このようにして再び自分の内側から言葉が湧き出し始めたのは、旅で得られた感覚が自己の基底に到達し、そうした感覚が少しばかり落ち着いたからだろう。しかし、そこでプロセスが完了するわけでは決してなく、旅で得られた感覚は自己の深層から再び浮上して顔を出す時が来るだろう。その時にまた文章を書くことによって、浮上した経験の意味と感覚を掴み直していくのである。そのようなことを迫られる日が、遠からず近い将来に必ずやってくるだろう。

起床直後に昨夜見た夢について文章を書き留めておいた。文章を書き留めてみたものの、その後何か後味の悪い違和感が自分の内側に残っていた。夢の中に登場した人物や出来事は、記憶に残っている範囲で全て書き留めておいたのだが、どうしても違和感が残っている。それはおそらく、夢のシンボルに対する意味づけが不十分であったことに起因しているのではないかと思う。

昨夜の夢に現れた豊富なシンボルは、それぞれ豊穣な意味を内包している。それら一つ一つの意味を紐解いていくことをしなければ、やはり何とも言えない未消化感が残るのである。確かに、自分の見た夢をいちいち全て解釈する必要はないのだが、それでも解釈可能であればそれを施しておくことが大切なように思える。先ほど夢のシンボルを列挙しながら、実は明確にその意味が掴めるものがあったのだが、その意味をあえて隠蔽する自分がいた。

上り専用の階段から下り専用の階段へどう移行すればいいのかわからなかったシンボルは、明らかに今の自分の姿を捉えている。一者の道と多者の道。上昇の道と下降の道。一者に向かって上昇する道を歩くことを宿命付けられているとさえ思えるような今の状況について、私は時々立ち止まって考えることがある。結局いくら考えたところで、自分にはこの道を納得のいくところまで上りきることしかできないことを知る。

© YOHEI KATO 2018

同じ問題にぶつかっては、いつも同じ回答だ。一つの救いは、下り道があるということを知ることができたということかもしれない。自分に与えられたこの道を、とにかく進めるところまで進んでいくこと。今日も階段の上り道をつまづきながら一歩一歩進んでいく。2017/8/21（月）

【追記】

上昇の道も下降の道も、どちらも同じ一つの道だった。2017/9/2（土）

No.101: A Blissful Rest

Last night, my heart was replete with blessedness about a nexus of artifacts and natural products. Being in the prodigious meshwork of human beings and nature gave my soul an entire relief. My existence and even IAMness rely heavily on others. Here, what is the borderline between others and me? Once we notice that the boundary is translucent, our soul can immediately take a blissful rest. Sunday, 8/27/2017

1456. 祈りを捧げるあの老婆の彫像のように

生きることが芸術となり、芸術が生きることとなる。コペンハーゲンのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館である彫像を眺めた時、そのようなことを思わされた。あの日、私はその彫像に完全に捉えられていた。魂の底から鷲掴みされたかのように、私はその場に立ちすくんでいた。その彫像は、一人の老婆の祈りの姿を表現したものだった。

私はその作品にただただ見とれてしまい、一切のことを忘れて、ただその作品だけを眺め続けていた。その美術館にはロダンが残した有名な彫像が多数所蔵されていた。しかしながら、私はロダンの作品よりも、この老婆の祈りの姿を表現した作品の虜になっていたのだ。その作品を様々な角度から眺めたり、ある特定の角度からこの作品を眺め続けていた。

この作品のモチーフとなった老婆は何に祈りを捧げていたのだろうか。さらには、老婆が見つめる視線の先には何があったのだろうか。私は思わず、この作品が展示されている部屋の中で、老婆が見つめる視線をたどるかのように同じ方向を見つめていた。

一つの作品をずっと眺めていたくなるような感覚。これは誰しも必ず一度は体験したことがあるのではないだろうか。どのような作品に対してその体験が訪れるかは人それぞれだろう。ただし、一つ言えることは、その作品こそが自分にとってかけがえのない作品であり、自分に対して重要なメッセージを発しているということだ。そうした作品に出会う時、私たちはそこで立ち止まるべきである。

そこに立ち止まり、魂の解脱が済むまでその作品を見続けることが大切となる。老婆の祈りの姿を表現したこの作品を見たのは、かれこれ10日ほど前になる。未だにこの作品が私を捉えて離さなかった究極的な理由がわからない。しかし、一つだけ考えられるのは、この老婆の祈りの姿そのものが芸術であったということだ。

おそらく、この彫像の作者も老婆の祈りながら懸命に生きる姿に芸術を見て取ったに違いない。祈りを捧げながら懸命に生きる姿が、一つの芸術作品として自然と立ち現れてきたに違いないのだ。ここで私は一つ、自分の仕事に対する大きな光を得たように思う。一人の人間が真摯に生きる時、それは一つの芸術になるのではないだろうか。

また、毎日を懸命に生きる中で生み出す一つ一つの創造物は、一つ一つの芸術作品になり、その人間が生涯を閉じる時、それらは一つの巨大な芸術作品に変容するのではないか。そのようなことを考えていた。

老婆の祈りの作品は、彫像の持つ魅力を教えてくれた。形を掘ること、そして形を残すこと。それらの双方が彫像芸術の中にある。

この作品を眺めた後、ホテルに戻った時、彫像を創出するかのように自分の作品を絶えず生み出していこうと固く誓った。一つの論文、一つの日記、一つの曲は、一人の人間が真摯に生きる中で生み出したのであれば、それらはどれも芸術作品になる。生きることと作ることが完全に同一化するまで他に何も求めない。論文を執筆すること、日記を書くこと、曲を作ることを絶えず行う中で毎日を十分に生き抜くこと。それらは自己の人生を著しながら生きることに他ならず、作りながら生きることに他ならない。作りに作る中で生を形取ること。それ以外は何も望まず、何も必要としない。

絶えず絶えず作りに作ることが自分なりに生きることであり、それが自分に与えられた生の究極的な意味であり、宿命に他ならない。あの老婆の祈りのように、毎日祈りを捧げ、作りに作る日々の充実

感と幸福感を絶えず感じていたい。その先の先に、人生の終焉によって初めて生み出される一つの巨大な芸術作品が姿を表すだろう。2017/8/21(月)

No.102: Crave for Creation

My wish for life is quite simple; all I want to do is create something to express my inner world. In other words, my aspiration for life is just writing academic papers, keeping a journal, and composing music.

Do I want anything else? No, I don't. Do I want to do anything else? No, I don't. What do I crave for? I thirst for creation because I was created, because my life is being created every second, and because I am destined for creation. Sunday, 8/27/2017

1457. 全集の購入と作曲実践について

今日は一日を通して雨が降ることは一度もなかった。とても穏やかな夏の一日だったと言っていいだろう。次回日本に一時帰国する際にオランダに持ち帰りたい書籍を昨夜何冊か購入した。寺田寅彦(1878-1935)、永井荷風(1879-1959)、川端康成(1899-1972)、小林秀雄(1902-1983)、吉田秀和(1913-2012)、それぞれの全集の中で関心のある巻だけを厳選し、合計で27冊ほど書籍を購入した。それらを次回実家で読む日は少し先のことだが、今からとても待ち遠しく思う。

寺田氏の全集の中で最も関心のあったのは彼の日記であり、それは永井氏に関しても同じである。小林氏だけは例外的に日記形式の文章が存在しておらず、また川端氏に関しては日記形式の巻が存在するのだが、それを入手することはできなかった。ただし、川端氏に関しては海外を訪れた際のエッセーが収められた巻を入手することができた。

音楽評論家の吉田氏に関しても彼の音楽評論を読む必要があると思ったというよりも、彼が世界を音楽旅行した際に欧米文化をどのように捉え、それと音楽をどのように結びつけて考えていたのかに関心を持った。そのため、吉田氏に関しても欧米訪問時のエッセーが収められた巻を購入することにした。彼らの全集については多くのことを書き留めておきたいのだが、それはそれらを読んでからにしたいと思う。

今日は特に午前中の時間帯が寒く、書斎の窓を開けていられないほどであった。寒ければ何をすればいいのだろうか。それは至って単純であり、内側の燃焼過程に身を委ね、絶えず読み、絶えず書けばいいのである。実際には、ここのところ読む以上に書くことを大切にしている自分がいる。書くことに関しては三つの創造物があり、それは論文、日記、音楽だ。

学術的な論文や日記を執筆することと作曲をすることの全てを含めて「書く」という行為とみなしたい。そうした点において、今日は書くことばかりを行っていたように思う。とりわけ残りの夏季休暇を作曲に最低限必要な音楽言語の習得に充てようと思い、今日は二つのオンラインミーティングを除いて、一日中作曲に関する学習と実践を行っている。

やはり二年目のプログラムが九月から開始されると、どうしても平日はなかなか作曲の学習や実践に多くの時間を充てることができないため、この休暇中に音楽言語の基礎を確立しておきたいと思った。残りの休暇は20日間を切ったが、今手元にある書籍を繰り返し読み込んでいけば、音楽言語に関して随分としっかりした基礎が構築されるように思う。

あえて「音楽言語」という表現を使ったが、厳密に言えば、私は自分の手で曲が生み出せればそれでいいので、究極的には作曲に必要な「作曲言語」なるものだけを学んでいけばいい。しかし、音楽に関する基礎知識が一切ないということと今は時間的余裕があるため、音楽理論と楽典を学んでいる。これらを学ぶことは、曲の理解に対する幅を広げることに有益であり、それが結局作曲にも効果をもたらすと考えている。夏季休暇の残りの時間を用いて、音楽理論と楽典のテキストをとにかく繰り返して読んでいこうと思う。2017/8/21（月）

No.103: Embodied Learning

If learners cannot connect their previous knowledge and experience with learning materials, they will not be able to learn anything. To put it another way, learners cannot incorporate any concepts and theories into the deep dimension of their existence unless they link learning materials with the current networks of their knowledge and experience.

In one word, learning must be embodied for each learner. Therefore, teachers should generate a field of learning to facilitate embodied learning. On the other hand, learners have to always

connect their networks of knowledge and experience with learning materials whenever they learn something regardless of whether it is new or not. Sunday, 8/27/2017

1458. 多始多終と定石の大切さ

始まりの多彩さと終わりの多彩さ。これはとても不思議な現象である。日記を書き留めながらふと、そういえば日記の始まりの文章が全く同一だったことはこれまでないのではないかと思った。何か特別なことを意識しているわけでは決してなく、いつも日記の書き出しは直感的かつ感覚的に生み出される。そうした書き出しがいつも異なったものであることは大変興味深い。同時に、日記の終わりについても俯瞰的に分類してみれば内容上同じ括りになるものは多々あっても、文章が同一だったことはないのではないかと思った。

始まりはいつも異なっており、終わりはいつも異なっている。そして、いつもと異なるその終わりがまた新しい始まりを生み出す。

自己という存在は、本当に自己創出(オートポイエーシス)的な特徴を持っており、絶えず微細な差異を含む存在を生み出し続けているのだということに改めて気付かされる。この始まりの多様さと終わりの多様さについては、実は本日の作曲に関する学習と実践の中で得られたことでもある。全く同じ始まりと全く同じ終わりを持つ曲というのもないのではないかという単純な気づきとそれに伴う驚き。日記と同様に、毎回始まりと終わりが異なる不思議さと面白さ。

それらを作曲を通じて味わえるのではないかという大きな喜びと期待が自分の内側に満ち溢れてきたのである。現在は、作曲の「学習」と「実践」という切り分けをしているぐらいの段階であり、それが完全に「作曲実践」という言葉に統一される日はもう少し先であろう。仮にその日が来た場合に、おそらく私は日記を執筆するのと同じように、毎回始まりと終わりの異なる曲を作れるようになっている気がする。その瞬間瞬間に自分を捉えて離さない思考や感覚を自由自在に曲にしていくこと。そうしたことが可能になる日を本当に楽しみにしている。

北欧旅行から帰ってきて、これまで以上に作曲の学習と実践に打ち込むようになった。数日前に、作曲を学んでいく過程は自分にとって、プログラミング言語を学んでいく過程に似ていると思った。

振り返ってみると、やはりプログラミング言語の基礎的な文法を学び、実際にプログラミングコードを書いていく中でそれに習熟していったことを思い出す。あの時もやはり文法や語彙を学びながら、プログラミングコードという文章を手を動かしながら実際に作ってみることが何よりも重要であった。

これは作曲においても全く同じだろう。基礎的な文法と語彙を学びながら、試行錯誤を通じてコードという文章を作っていくのと同様に、音楽の文法を曲を作りながら学ぶことを通じて作曲に習熟していきたいと思う。また、今日の作曲実践の中で、始まりの数手と終わり方は確かに多様でも、初手と詰めの一手だけを取り出してみるとそこには定石のようなものがあるように思えた。この点はまさに将棋と同じである。

もちろん将棋においては、初手に関して奇をてらう指し手もあるが、まずは定石を押させていくことが重要だろう。初手に関して定石を押させると、始まりの数手の多様さはある種の個性となり、そこからの打ち手の進行にはまた定石がある。

今日の作曲実践から、改めて定石を押させることの大切さを教わった気がする。そして何より、定石があってもそこに一曲一曲の個性が宿るという事実が何よりも私を嬉しくさせた。明日からは早起きをして作曲の学習と実践に取り組みたい。2017/8/21（月）

No.104: Questions Always Await Us

Questions are always awaiting us. They are waiting for being asked by us. The aspect of questions looks like an unadulterated child with full of curiosity. Interestingly enough, asking a question and answering it simultaneously occur.

Even if the question has not been answered yet, it is walking towards the answer already. The process in which a question always generates another is key to finding an answer. Our learning proceeds this way by exploratory inquiry with an inquisitive mind. Sunday, 8/27/2017

1459. モーツァルトになった夢

辺りには無風が広がり、時が止まっているかのような景色が広がっている。今日の早朝はいつも以上に静かであり、小鳥の鳴き声も聞こえない。目覚めと共に辺りの景色を見渡すと、日が昇るのが遅くなり、外の世界はまだ暗かった。そのような世界の中で今日の活動を開始させる。

空に溶け込んでしまいそうなぐらいの微量の雲がちらほらと見えるが、天気予報によると今日は晴れのようだ。北欧旅行から帰ってきてまだランニングをしておらず、それそろ身体の調整を兼ねたランニングが必要だと感じていたため、今日は昼食前にランニングに出かけようと思う。

近くのノーダープラントソン公園をゆっくりと走り、その足でインドネシアンレストランに昼食を買いに行き、行きつけのチーズ屋に立ち寄ろうと思う。今日は身体の調整をしながら自分の仕事に打ち込む日としたい。

昨夜の夢の印象が自分の内側にまだ残っている。夢の中の私はモーツァルトだった。おそらく今の自分の年と同じぐらいか、あるいはそれよりも少し若いぐらいのモーツァルトに自分がなっていた。一軒のこじんまりとした家が小高い山の草原地帯に建てられており、その家の中に私はいた。

家の中はとても明るく、昼下がりの太陽光がいくつもの窓から家の中に差し込んでいた。家の中には物が多くなく、とても小綺麗な印象を与える。必要最低限の物だけが揃っており、それらが全てあるべき場所に収納されている。この家の中で私は、妻と二人の子供と談笑をしていた。

二人の子供はどちらも男の子でとても元気がいい。部屋の中を駆け回りながらじゃれ合っている。そうした様子を微笑ましく眺めながら、私は家の片隅にある仕事場で作曲を始めることにした。とても小さな木の机と椅子だけがそのスペースに置かれており、机の上には二冊の本だけが置かれていた。机を五つに区切ると、左から二つ目の区切りに一冊の本が置かれており、右から二つ目の区切りにもう一冊の本が置かれていた。

二冊の本は机の上の空間で対称をなしていた。私が椅子に腰掛け作曲を始めようとすると、子供が近寄ってきて、「お父さんがいつもとは違って机で作曲を始めた」と笑顔で述べた。それを聞いた時、

自分がいつもは机の上ではなく、どうやら場所を問わず至る所で作曲をしていることがわかった。椅子に腰掛けてみると、視線の先には窓もなく、ただコンクリートの壁しか見えなかった。

そのコンクリートの壁を前に、私は圧迫されるような気分が少ししたため、椅子から立ち上がり、食卓の方へ向かった。すると妻が、「お父さんがここで仕事をするみたいだからあなたたちは外で遊んで来なさい」と二人の子供に言った。

その言葉に素直に従うように、子供たちは元気良くドアから外の草原に遊びに出かけた。子供たちが出て行くと、妻は笑顔を振りまきながら何やらドイツ語で私に話しかけ、寝室の清掃を始めた。寝室で少しばかり妻と談笑をしていると夢から覚めた。

自分自身がモーツァルトになるという不思議な夢だった。質素でありながらも明るい家が印象に残っている。そして何より、モーツァルトの家族はとても幸せそうだった。机の上に対称をなす二冊の書物と場所を選ばずに作曲をしていたモーツァルトの特性が脳裏をよぎる。幸福感に満ちた家庭の中で仕事に励むことができるのは、格別な幸福に違いない。2017/8/22(火)

No.105: Social Problems: Problem-Solvers and Problem-Creators

Social problems are neither tangible nor objective. In reality, they are social constructs. We often unknowingly generate social problems by ourselves. This is a little bit ironic because we always aim to solve social problems, but those problems are like ghosts created by ourselves.

We have to contemplate the fact that we are often eager for solving social problems in good faith, but that our shallow goodwill unfortunately creates phantom-like other social problems. In short, we have to be aware that we are not only problem-solvers but also problem-creators. Without this awareness, we will continue to chase invisible phantoms forever that we generate. Sunday, 8/27/2017

1460. 日記についての所感と夏祭りの終わりから

午前中オンラインミーティングを行い、知人の方と話をする機会があった。日々の生活の中で他者と対話をするということは、多くの気づきを得るということに加え、自己と他者との共通点や相違点、さらには共時性を理解し、人間存在に対する認識をより深めることにつながると改めて思った。

対話の中で日記について話題が及び、もう一度自分の中で日記の存在意義と役割について考えを巡らせていた。その瞬間瞬間の自己の姿をまるでビデオカメラで録画するかのように絶えず文章を書いていたいという思い。思考や感覚を含めた意識の流れをその流れのまま記録していくような日記。だが、そうした日記は実現不可能なだけではなく、ある問題を抱えていることに気づく。日々生きてく中で湧き上がる思考や感覚を全て捉えていくことが重要なのではなく、自分の人生の主題と関わる思考や感覚を厳選して文章の形で捉えていくことが重要だ。

人間の一生は、各人固有の人生の主題によって紡ぎ出される一つの尊い物語である。大切なのはその人の主題であって、その人を取り巻くありとあらゆる雑多なことではない。人生の主題に関わる思考と感覚だけを文章の形で残していくことによって、それが結果的に大きな一つの物語になる。日記というのは、日々の雑多なことを書き留めるのではなく、自分を捉えて離さない主題を中心に据えることによって生まれる思考や感覚を書き留めていくためにあるのだと思う。

ミーティングが終わり、顔を上げて少しばかり書斎の窓の外を眺めていた。今日は穏やかな夏の一日であり、天気にも恵まれている。ぼんやりと景色を眺める中で、まだ足を踏み入れたことのない、息を呑むような絶景を持つ自然がこの世界にはたくさん存在することに気づき、この地球上で自然が美しい場所をいくつも訪れてみたいという思いが到来した。自然の景観美の中で自然の恵みを感じ、その中で論文や日記を執筆したり、作曲をして暮らしたいという静かな思いに包まれる。いつかそうした日が来るかもしれない。

昼食前にノーダープラントソン公園にランニングに出かけた。北欧旅行の数日前以来なので久しぶりに走るということもあり、いつも以上にゆったりとしたペースで走っていた。ノーダープラントソン公園に行くと、どうやら夏祭りが行われていたようであり、多くの人たちが屋台のセットを片付けているところに遭遇した。祭りという非日常が終わり、静かな日常が再び始まる。そこで私が見たのは、非

日常と日常の境目にあるなんとも言えない哀愁の漂う光景だった。祭りが終わったことにより、確かに何かが終わったのだという感覚と、しかしそれでも終わらないものがあるという感覚の二つを感じていた。

公園を抜けて、そのまま行きつけのインドネシアンレストランに立ち寄った。いつも通りのランチメニューを注文しようとしたところ、店の奥から可愛らしい小さな女の子が顔を覗かせた。店主曰く、彼女の孫なのだそうだ。まだ二歳とのこともあって言葉はそれほど喋れない様子だったが、彼女の笑顔は言葉以上のことを私に伝えていた。その小さな女の子と店主に別れを告げて、店を出た時、私の気持ちはとても明るかった。

もう少しで夏が終わり、秋がやってくる。夏が終わったとしても終わらぬものを内側に抱えながら、今日からまた一日一日を過ごしていきたいと思う。2017/8/22（火）

No.106: Qualia of Words

Every word possesses unique qualia. Qualia are qualities perceived or experienced by us. For instance, when we look at a red object, we can feel its redness. Similarly, all words encapsulate idiosyncratic qualia. I feel that quaila hold not only types but also dimensions.

Dimensions represent the depth of the qualities of words. When we think about “happiness,” each of us will have different quaila of the word of happiness. All words inherently contain an infinite number of layers of qualia. If we neglect the rich dimensions of qualia of words, our words will walk alone in a superficial way. Monday, 8/28/2017